

森林環境税を活用した 里山林再生の取り組み

～平成19年度 里山林機能回復整備事業の記録～



平成20年8月

奈良県農林部森林保全課

生駒市鹿ノ台緑地の里山林機能回復整備事業を終えて

いこま里山クラブ

代表 海老澤 長五郎

(1) 団体(クラブ)の紹介

① 活動場所と内容

- ・ 生駒山山麓（定例活動）… 山麓の森林整備(4.4ha)…19年度 391名参加
- ・ 矢田丘陵檜ノ木峠竹林（自主活動）… 竹林整備、筍取り(0.3ha)…19年度 145名参加
- ・ 矢田丘陵と山麓の遊歩道（自主活動）… 沿道草刈整備（約10km)…19年度 270名参加
- ・ 東生駒民有地（自主活動）… 森林整備と畑ワサビ、椎茸栽培
- ・ その他生駒市内の荒廃民有里山林（自主活動）… 森林整備再生活動

② クラブの活動目的

目的1…森林ボランティアとして生駒の山林・里山環境を再生、保全していく。

目的2…活動を通じて里山の理解を深め、市民参加のボランティア活動の輪を広げ、
花と緑の生駒を実現する。

目的3…会員の健康向上・体力維持と相互理解のもと円満で充実感のあるクラブ活動を目指す

(2) 整備内容等の概要

- ① 整備場所：生駒市鹿ノ台東1丁目13番8（鹿ノ台第6緑地）

② 整備活動実績

整備日	内 容	参加人数
H19. 11. 20	下草刈整備	15人
H19. 11. 21	同上、枯損木伐木整備	10人
H19. 11. 26	同上、笹刈、伐木棚積整備	14人
H19. 12. 5	笹刈と不要木除伐整備	12人
H19. 12. 6	同上、笹・伐木棚積整備	10人
H19. 12. 18	整備地の整地と見直し整備	12人
6回		73人

③ 整備活動を終えて

- ・ 30年以上放置の笹藪（最長5m）の整備は葛が絡まっており非常にきつかったが、整備後は全員満足顔だった。
- ・ 整備後の森は木漏れ日が入り爽やかな風も通って、地元鹿ノ台や日々の散歩者から気持ち良い森に戻ったと感謝された。

(3) 利用活動

H19. 12. 20 整備観察と樹木観察及び自然観察実施（参加15人）



整備後の森

奈良県もてなしのまちづくりモデル地区の認定と里山林機能回復整備事業

生駒里山を守る会 川名 國夫

地球の環境保全にかかわるように、生駒里山を守る会は、奈良県の森林環境税の助成を受けて、五反原の里を取り巻く里山林1町歩あまりの広葉樹林帯の下刈や間伐を、生駒市小平尾北の奥で行なっています。年間6回ほどの作業日程です。森林内の作業は主に手鋸手鎌で行ないませんが、太木太枝の玉切や間伐などは、2～3回チェーンソーも使います。



五反原の里山林作業年間計画で、NPOの日本森林ボランティア協会の森林大学OBの「モリノワ・くらぶ」を中心に、NPOシニア自然大学のOBや農事専門家が、地元は勿論、箕面、摂津富田、川西、城東、都島、阿倍野、西宮、遠くは熱田から、老いも若きも環境保全に理解の深い、心の揃う人たちが、常日十人あまり参集してくれます。

下刈した雑木や孟宗竹は、枝払いして、杭や丸太にした後は、3Mほどに玉切りにして、棚積みにしていきます。小半世紀も手入れのない雑木林の中は、イノブタ、狸の通り道で、昼なお薄暗いのですが、毎回の下刈、枝打ち毎に、森は次第に陽が射してきました。天が見えて、森も自分も生き返える思いがして、汗拭きながら、思わず深呼吸してしまいます。

里山林機能回復整備事業を開始してから、丸2年を経過しました。丸っきりのボランティアのグループの奉仕活動でしたが、森を横断する農道の200Mあまりの道は、明るい軽やかで楽しげな道になりました。この沿道で、一面トタンなどで猪豚除けの垣根を巡らせた畑中で、耕作している近くの三木さんが「もうイノブタも行き来せえへんやろ。こんだけ明かるなったらな。」と、まずは森らしくなった里山の、薄日の射す向山の山肌を見ながら、「安堵した。」と感謝してくれました。3年前サツマイモは収穫直前、すっぽりと実に綺麗に横取りされました。除伐では花の咲く木は残したいものと、心がけているのですが、お天等さんは万能の神様です。皆伐しても、「ヒコバエ」が更に大きく育つし、新しい強い芽も芽吹いて出ると言った具合ですから、森遊び第一の目安で、里山の回復事業を進めています。

近くの幼稚園は、カリキュラムを組んで、年5回、保育園は1回、東大阪の縄手北小も、筍の季節に、芋の苗植えをかねて、里に入園して、ザリガニ釣りなど遊山してくれます。

間伐のあとにはコナラ、カシ、クヌギの実をいれています。次は植栽も重点的にしたい。

生駒市から作業や技術をご指導いただきながら、県森林保全課の杭打ち範囲を、園児や児童たちが、昆虫や山野草の観察採集、さらに樹木調査、ビオトープ作りなど、山遊び野遊びを存分に活してもらえるフィールドにしたいと考えて、地主さんにもお願いしています。

野山で遊び呆けて、手足をくじいたり、擦り傷をつくったりして、「かにかくに洪民村は恋しかり思い出の山思い出の川・・・啄木」と、大自然を心の拠所に、いまにし故里の原風景をおもい、いいお友達をつくり、どこかで自然を愛してもらいたいと願っています。

今私達は、農村の原風景を修復復活に努力して、棚田での赤米や黒米の田植え、幼稚園の子供たちが、里の口に大きな七夕を飾ってくれます。チロクの谷間にさし渡した2本ロープの鯉幟、そして巨木からつるした常設のブランコを設えています。お星様に一生懸命お願いをする素直な心の児たちが育ってくれるようになって欲しい。生駒里山を守る会の五反原の里は、幸いにも、奈良県もてなしの心まちづくり協議会より、飛鳥や今井町、洞川、柳本などの奈良県まちづくり拠点十傑について、H20年の新17箇所の中に、この里も入れてもらいました。田遊び、野遊び、小さな水遊び、ファミリーでの森遊びの出来ますエリアとして、今後の発展を託されて、エールを送ってくださった形です。

棚田の一角に信州八ヶ岳農業大学校で長期に無化学肥料の技術を培養してきた、農林専科の石尾さんが「道草農園」を開設されました。里は年平均1200人ほどの人が利用して頂けますので、「もてなしの心まちづくり」に大きく寄与して頂けるでしょう。

生駒里山を守る会・五反原の里は、農林園芸野外活動に関われる、生駒市内の数少ない癒しの広場です。自然とのふれあい、自然との共生の広場として、確かな位置を築きつつあります。里山林機能回復整備事業はまだ3年分も残っています。



整備前



整備後

自然に触れよう！感じよう！

～水間地区の里山整備、平城宮跡休耕田での農作業体験～

NPO 法人 きゃんす家

藤 まりこ

【きゃんす家について】

きゃんす家は森林環境教育・里山林休耕田畑機能回復整備事業を行う団体です。2006年12月にNPO法人格を取得し、今日に至っています。会員は、奈良女子大学・奈良先端技術大学院大学の学生、社会人から成り、イベント時には他の大学の学生や地域の方も、当日ボランティアとして参加してくれます。私たちは、子どもたちが自然や里山に親しむきっかけをつくりたい、という思いから活動を始めました。

今、里山林および休耕田畑の荒廃が叫ばれています。都市近郊や集落周辺でも、手入れが行き届かず放置された竹林や広葉樹が目につきます。しかし、いきなり里山保全を、といっても、都市部に住む人たちは、なかなか里山を身近に感じるきっかけがありません。そこで、きゃんす家では、家族で里山に遊びに来てもらえる機会をつくろう！と考えました。都市部の子供たちや家族に、自然に親しみ、関心を持ってもらうことが、ゆくゆくは里山の保全につながっていくと思うのです。

【里山整備内容】

きゃんす家の活動場所は、奈良市水間地区です。平成18年11月から、水間町の里山1.0haを中心に作業を進めています。整備回数は10回ほどになります。0.5haが整備済みです。活動を通して、里山整備の難しさを感じています。一日に整備ができる範囲は少なく、思ったように進まないのが現状です。しかし、一方でやりがいも感じています。間伐する前は暗くてさみしい雰囲気だった里山が、間伐した後は、柔らかな光を受け、明るくなります。それを見ていると、作業の疲れも癒されていきます。整備によって森林の機能が回復していけば、地域の景観の回復、災害の発生の減少、水資源などの充実、といった変化が生まれます。それは、周辺の集落、さらに都市部に住む人々の生活を豊かにすることにもつながっていくといえます。



【整備場所を利用して】

整備場所を通じて、地元の方々とつながるきっかけができました。地元の方々の協力のおかげで、昨年度より、水間でイベントを開くことができています。今年度は、8月に『竹で遊ぼうバンブー・フェスティバル☆』を行います。都市部の子どもたちとその家族、そして水間地区の人たちと一緒に、里山で伐採した竹を使ってバームクーヘンを焼いたり、ダンスをしたりするイベントです。現在、水間地区の皆さんの快い協力をいただきながら、イベントに向けての準備をしています。昨年度のイベントでは、参加者の方に、里山の豊かさやめぐみ、またその現状を知ってもらう機会を提供できました。今年度もイベントを通じて、参加者への環境教育を一層進められるよう、努めたいと考えています。

【2008年プロジェクト】

今年度から、平城宮跡の休耕田を利用して、半年間の食育教育を行います。今年度は奈良市・生駒市の家族や子ども会を集めて、サツマイモを中心に、大豆、とうもろこし、コスモス、などを育てます。5～10月に月一回手入れをし、11月には収穫祭、12月には収穫物を使った料理体験を行います。すでに6月まで実施しましたが、うれしそうに土や苗を触る子供たちの姿がたくさん見られました。初めての長期にわたる取り組みで大変なことも多くありますが、喜んでくれる皆さん、農作業に興味を示してくれる皆さんの様子を見ることができ、非常に充実しています。これからもみんなで楽しく手入れをし、12月にはおいしい料理を作れるよう、スタッフ一同、さらに頑張っていきたいです。

きゃんす家の「きゃんす」は、「来る」という意味の方言です。私たちは、たくさんの人たちが集まって交流をする、そんな場を提供できる団体でありたいと願っています。今後も里山林および休耕田畑の整備を進め、さらに整備場所の利用をしていくことで、都市部、山間部という地域や、子どもから大人という世代を超えた交流を実現していきたいと思えます。

森林環境税を活用した里山林整備の取り組みについて

子ども里山探検基地づくり

NPO 法人 山野草の里づくりの会

① 団体の紹介

NPO 法人山野草の里づくりの会は桜井市の東北部、旧上之郷村地域で、地域で以前より生息している動植物の保護を目指し活動しています。具体的には、放置山林の復旧整備、遊休農地の復旧と活用、山野草自生地の保護活動を行い、また多くの人々に里山の自然に触れていただき自然保護の必要性を肌を感じていただくことを目標に「花の宴」（自然を楽しむ会）や子どもと保護者を対象とした「里山自然探検」「みんなで 生かそう ビオトープ」なども開催しています。来訪者に気軽に自然探索をしていただける山野草園も管理し、四季おりおりの山野草を楽しんでいただいております。公共団体や諸団体の実施する催しにも積極的に参加し、自然物の活用や自然保護の必要性をPRしています。



② 整備内容等について

平成19年度は昨年の整備地の残部分と竹や落葉広葉樹が混在している場所の2か所の整備を行いました。いずれも、子どもたちの遊び場所との目的で「子ども里山探検基地づくり」としての整備です。平成19年9月から平成20年3月まで10日間延べ234人がかかり、1月～2月の積雪で3月迄かかりました。

昨年の残部分8aは主に孟宗竹が侵入した部分で、竹の伐採作業が主でしたが、急傾斜地があり困難な部分もありました。

17aの復旧地は竹と落葉広葉樹が混在した地でここでも竹の伐採が主な作業となりました。伐採した竹は、山野草の立札に利用したり、無農薬野菜の手などに利用しましたが、多くは里山の肥料となります。



③ 整備場所の利活用について

平成18年度の整備場所では、県の希少種ササユリが芽を出し、ショウジョウバカマも花を咲かせました。絶滅危惧種のシュンランも多く見られ、新たに希少種のオオバノトンボソウも数株発見しました。来訪団体の利用もあり、会でも催しなどで活用しました。平成19年度で残りの8aを整備しその山の整備は完了しました。平成20年度には、「里山自然探検」として子どもと保護者の参加を募集し、探検基地となるツリーハウスづくりを実施します。

また、新規場所は35aの竹藪で19年度は17aを整備しました。30年以上放置されていた場所で、作業は困難を極めましたが光の入る竹藪となりました。この地にも絶滅危惧種のシュンランが数株発見され、希少種のササユリ、ヤマユリ、ギンランもあります。竹は孟宗竹、淡竹、真竹の3種が混在しており、時期を変えての筍が楽しめます。また、新たに発足しました「里山の山野草を守る会」のメンバーが月2～3回山野草の調査と保護活動を開始しましたので、山野草の里づくりの会の活動と併せ維持管理の体制が整いつつあります。



整備後（遠景）



整備後（近景）

竹をキーワードに世代間交流が活発化

私たちが平成 18 年度から取り組んでいる里山(竹林)は、矢田丘陵の中腹に位置するアジサイで有名な矢田寺とモミジの名所東明寺を結んだ中間地点の麓にあり、この一帯に広がる竹林をタピ°ア「矢田の里」と命名しました。

5 年計画で 0.66ha の「竹やぶを竹林に」する事業です。この再生事業に取り組んで 2 年が経過した。矢田丘陵の麓にあるタピ°ア「矢田の里」から東の空を眺めると春日の山々や若草山など素晴らしい眺望が開けてきます。

作業は夏の 2 ヶ月間を除いて、毎週月曜日と土曜日を設定。7~10 人が作業に従事して、厄介な立ち枯れの伐採に手合いながらも計画を上回るペースで順調に進みました。



整備前



整備後

作業基地として農家の方から 600 坪の休耕田を開放していただき、竹炭窯 5 基を備え、竹でつくった休憩場もあり格好の憩いの場ともなっています。

当初は、地元農家の方々からヨソモノ扱いされ「NPO ってなんなの」と疑心暗鬼の目で見られていた。そこで仲間で話し合い、「地元の人たちにあえば必ず挨拶しよう」、「今、取り組んでいることを話そう」と申し合わせて地元農家の中に溶け込む努力をしてきました。

今では、「ご苦労さん」と声を掛けられ、トマトなどの差し入れをいただくなどすっかり私たちの応援団になった感じがします。心強い限りです。

私たちの活動が地域の人たちにお役に立つとすれば本望ですし、元気な地域になることに多少なりとも貢献できることを誇りに思っています。

竹の伐採作業が軌道に乗り、5年計画の完了の目途がついたことで、この1年間は竹の利活用を通じて元気なまちづくりに積極的に取り組みました。小学生や中高年など世代を超えた交流のツールに「タケ&竹」をしかけたところ、想像以上に竹に関心と興味を抱いていただきました。

例えば、地元小学校の6年生を対象にした総合学習『竹に触れ、竹と遊ぼう』～いかだづくりにチャレンジ～9時間のカリキュラムの協働支援です。

里山の実態や竹の特性など竹細工品を持って講義したところ、休憩なしの2時間授業にも目を輝かせて集中して聞き入る生徒の姿勢に担任の先生が驚いていました。



いかだづくりにチャレンジ

野外活動ではタケウマづくりとプールに浮かべるいかだづくりにチャレンジ。戸惑いながらもノコギリやナタを使い、紐で竹をくくる練習の成果が出て、自分たちで作上げた作品に歓声をあげてモノづくりの面白さを実感した生徒たちの笑顔が印象的でした。スタッフは「竹のおじさん」になってしまいました。

秋には、持続可能な循環型資源である竹のもつ神秘性や威力を今一度見直すきっかけにしたいと考えて「里山林の再生と今日的意義」と「循環型社会におけるタケ&竹の役割」の基調講演とパネルディスカッション『竹やぶを竹林に、竹材を生活の場に』を開催して新たな方向性の示唆をいただきました。

里山の再生によって日本の原風景を取り戻し、心のふるさとが蘇り都会人に心の豊かさと自然環境の大切さを学ぶ格好の体験学習の場が生まれます。

今、「矢田エリアの魅力づくり」を掲げて再生された里山でいろんな体験学習のできる場づくりの取組みが始まっています。里山の再生と共に里山の生態系の保護や観察ができるビオトープづくりやホテルの復活および竹炭づくりなどが楽しめる体験学習ゾーンのある、いわゆる「屋根のない博覧会場」で平城遷都1300年祭の賑わいをめざしています。

「森林環境税を活用した里山林整備の取り組み」

～平成19年度の整備記録～

平群里山クラブ

団体の紹介

近鉄・元山上口駅から西へ、直線距離で1km。新興住宅地のすぐ裏に里山が広がっています。地元では“平群の桃源郷”とよばれている地域の一角に平群里山クラブの活動拠点があります。名づけて“KATIKATI山”。スワヒリ語で「真ん中」という意味。信貴・生駒山系のほぼ真ん中にあり、森林ボランティア活動の中心になろうという意気込みから、つけた名称です。この1ha弱の竹藪を整備しはじめたのが、4年前の2004年5月。



今では、会員75名、近くのヒノキ林1.5haと県の『里山林機能回復整備事業』の対象山林1.5haの合わせて4haを活動領域とするまでに成長しました。里山の荒廃化は平群でも進んでおり、特に竹藪の拡大が著しく、クヌギ・コナラを中心とする雑木林が侵食されています。私たちはKATIKATI山を里山再生のモデルとして整備し、広く住民に保全活動の意義をアピールしようと様々な活動を行っています。30年以上も放置されたこの山は、人の進入も困難なほどに藪化した真竹と孟宗竹に覆われていましたが、ほぼ3年間で竹の皆伐を達成しました。その結果、美しいクヌギ・コナラ・山桜の林が再生しました。

伐った竹で竹炭を焼き、道の駅で販売し活動資金を得ました。イノシシ防除の竹柵をつくり、チップパーで竹チップをつくりました。伐った跡地では毎年細い竹が猛烈な勢いで生え伸び、それを刈り払い機で伐りました。網の目のように張った竹の根を切って、畑地を作り出しました。椎茸やアシタバを栽培し、果樹や広葉樹の苗木を植えました。頂上の復活した雑木林にはビニールハウスを建て、物置小屋を造り、4m四方のデッキを造りました。

そこからは大和三山や大峰の山々が遠望できます。このデッキを舞台にして、様々な催しを行いました。毎年、4月の初めは総会を兼ねて「花見の会」、夏の終わりには「森の音楽会」、年末は「もちつき・忘年会」。いずれも40～50人の参加で自然の中で人と人の交流が深まりました。定例活動日は毎週水曜日と毎月第2日曜日。定年退職した男たちが常連ですが、主婦もいれば30代の“若者”もいます。外に向かって啓蒙的に活動しているものでは、平群町の「竹明かりの集い」への参加、「竜田川まほろば遊歩道」整備への協力、馬銚淵の竹藪整備、生協やボランティア団体からの要請による親子竹細工教室の開催などがあります。会誌「KATIKATI山便り」は10号を数えました。HPも充実しています。

里山林機能回復整備事業としての19年度整備記録

事業対象0.5haのうち初年度の19年度は0.1haを整備しました。

- | | | |
|-----|-----------|---|
| 1回目 | 10月14日(日) | 27名参加、孟宗竹の伐採 |
| 2回目 | 12月9日(日) | 22名プラス10数名、孟宗竹の伐採・運び出し、竹柵設置。(プラスは平群町ボランティア協議会のメンバーで「竹明かりの集い」用に竹を伐採したもの) |
| 3回目 | 2月24日(日) | 23名参加、孟宗竹の伐採、竹柵設置 |

この3回の主要活動の他に6回の水曜定例活動日に進入路の整備、周辺の下草刈り、除伐を行った。延べ人員50数名。

当初、竹藪を皆伐する予定でしたが、良質の筍を産出するので筍を採る竹林として整備することとしました。そのためにイノシシ除けの柵が必要となり、大幅に延べ人員を増やしました。

大人数が限られた場所で作業するため、特に他人が伐った竹が飛んでこないように(実際に、上で伐った太い孟宗竹が下に急速度で滑り落ちることがあり、もしこれに直撃すれば大怪我する危険がある)注意を再三促しました。全体の作業を監視する人員も確保して危険を防止しました。伐った竹は竹柵、竹炭、竹チップに利活用しました。4月には採りきれないほど大量に立派な筍が収穫できました。



整備前



整備後

“竹峪の郷”の原風景復活と再生へ

(荒廃の竹藪を夢一杯の里山林桃源郷を目指して)



向渕さとやま遊友クラブ
代表 清水康男

【向渕さとやま遊友クラブについて】

向渕（むこうち）地区は、室生寺で知られる宇陀市（18年1月合併）室生区の西北部の玄関口に当たり幼い頃は、“竹峪の郷”と呼ばれ、あちこちに美しい竹林がありました。

それらの竹は匠の技により特産品として、農家の大切な生活の道具に変身（竹製品）していました。日本の高度成長を支えた故郷の企業戦士達が、現役をリタイヤしてふと郷里を眺めると、かつて観た農村の原風景が隣接する竹藪から竹が侵入し竹の無法地帯となり見通しの悪い住環境になってしまっていることに気づきました。そこで、地域の先輩や同世代に呼びかけ多くの有志を募り、向渕の里山景観を取り戻し旧来の整備された“竹峪の郷”の復活を目指し、向渕さとやま遊友クラブを結成しました。私たちのモットーは、お互いを思いやり無理のない活動を通じて向渕の自然環境を創造することと、「あそび心満載でアイデア百出」こんな雰囲気大切にすることです。年齢層は40才代から70才代で中心が60代であり、地域の人々で構成するボランティアの集まりです。



【整備内容等について】

整備箇所は向渕地区の中央を流れる大野川南岸の竹藪、通称「クボシリ」と呼ばれている0.3haの竹林を対象として、孟宗竹の伐採を中心に雑木伐採、下草刈り等の作業を行いました。7月8日に市役所から機材が届き、作業を開始しました。

毎月、月末の日曜日を定例活動日として、



竹伐採、竹破碎、遊歩道作り等に計12回述べ160人、その他の準備作業や片付け等で計40回述べ128人の参加者を数えました。

伐採した竹材は、破碎機によりチップ状にして伐採後の竹林の中の遊歩道に敷き、バンブーロードとしました。また、竹チップを農作物の有機肥料として使うと、生育に良いことを聞き、地元自治会150軒に配布して、その効果を計って頂く事にしました。

竹林内は急な傾斜地で足場は石が露出している草に覆われており、作業環境は大変厳しいものがありました。元々山の子育ちの参加者が多く、怪我も無く安全に作業を終えることが出来ました。



【整備場所の利活用について】

間伐により山の反対側が、見通せるようになりましたので地域全体が明るくなりました。また日陰でひっそりと育っていた、山椒、三つ葉つつじ、山あじさいが太陽の光を受けて生き生きとしています。

竹チップ遊歩道は、向漕の新しい憩いのスポットとして親しまれるよう後年の整備を考えています。整備後の竹林には、地元で生育している、うり楓、朴の木、コブシ、ガマズミ、イロハモミジ等の低木落葉樹を中心に近くの山から移植を行い、四季を通して楽しめる里山の景勝復活を目指します。

最後に、竹チップは、自然環境にやさしい有機肥料として活用されるよう計画しています。

『虫いっぱいの里山をめざして』

～森林環境税を活用した里山林整備の取り組み』

虫いっぱいの里山づくり隊

① 団体の紹介

私達の団体の名称は、橿原市昆虫館ボランティア『虫いっぱいの里山づくり隊』で、主に橿原市昆虫館周辺に広がる雑木林等を整備しています。子どもを中心に多くの人たちが、安全&安心に自然とふれ合い楽しめるように、また、昆虫を始め身近な生きものや自然の不思議を探り、その謎を解いていけるように、そして、昆虫世界の面白さ、里山の自然の素晴らしさをずーっと未来へと伝えていけるように、「虫いっぱいの里山」を目指して、活動を続けています。

② 整備内容等について

毎月 2～3 日間の野外活動を行い、主として、橿原市昆虫館の裏山の雑木林の下草刈りや植物の植え込み、竹や樹木の間伐を行ったりして、虫の住み家作りを行っています。

平成 19 年度の整備活動回数は約 40 回でした。整備場所は、昆虫館の裏山や周辺の散策路、畑などです。

整備内容としては、整備対象地域での下草刈りや枯枝等の剪定、危険な樹木の枝打ちだけでなく、実生苗の移植(クリ・クヌギ・コナラ・アベマキ等)や、畑のハーブ等作物栽培、散策路及び移植した苗木周辺の草刈り、裏山の笹刈りやツル伐り、竹の伐採、さらには、イベントの運営等、それぞれのメンバーがイロイロな場面で活躍しています。

例えば、昆虫観察や自然体験などの野外活動のお手伝いや、学校遠足等団体の

案内、各展示室での解説、温室のチョウや植物の説明、昆虫とのふれあい体験等も実施しています。



整備前



整備後

③ 整備場所の利活用について

平成19年度は、9月に「自然写真講座」、11月に「里山森羅万象コンサート」等の普及啓発イベントを開催しました。12月には里山の素材を活かし、クリスマスやお正月向けの大きな飾り物を作って、昆虫館入口に展示しました。また、ボランティアを中心に



里山づくり講習会

に知識や技術向上のため、平成19年5月、平成20年1月と3月に「里山づくり講習会」等を実施しました。

平成20年度も、フィールドを使っての自然観察や写真撮影講座の開催、「むし祭り」等での出展や普及啓発、里山素材を活かした七夕飾り、様々な研修会の実施等を企画し、ボランティア皆でアイデアを出し合い、楽しみながら活動を進めています。



東部農林振興事務所管内の里山林機能回復整備事業

東部農林振興事務所
主任技師 中村 義久

1. 里山林の現状と課題

東部農林振興事務所管内では、古くから薪炭材などの利用により住民の手が適度に入った里山林や竹林が多くありましたが、近年は里山林の木々や竹製品が生活の中で利用されることが少なくなり放置された森林が増加しています。人の手が入らない里山林では森林全体が鬱そうとした暗い林になり、森林の適切な成長が阻害され災害の危険性が高まることがあったり、農林産物被害を起こす鳥獣の隠れ家になる可能性が高くなるなど、諸問題の原因となっています。また竹林では、手入れされず放置されて野放しとなった結果、勢力を急速に拡大し隣接する森林を駆逐しながら増殖している例も見られます。森林環境、獣害対策及び景観など様々な面から里山林環境の改善が望まれています。

2. 東部農林管内の事業概要

年々増加傾向にある放置された里山林を少しでも改善していくための取組として開始された里山林機能回復事業は、初年度の平成18年度に東部農林振興事務所管内の1団体の取組が採択され、平成19年度には新たに1団体が名乗りを挙げ、計2団体が事業を実施いたしました。

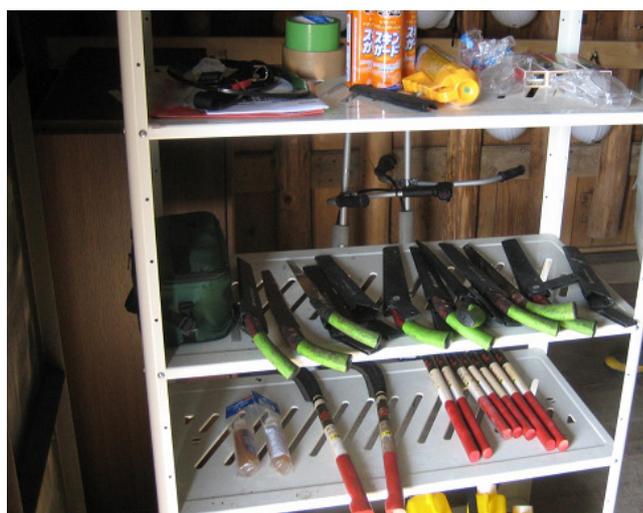
各団体はそれぞれ意欲のある地元のボランティア団体で構成されており、東部農林振興事務所としては市町村と連携を取りながら、現地での安全面の指導や周囲測量の技術指導、また事務処理に関するサポートなどを行いました。



作業前の里山林



作業後の里山林



作業用具の適正な管理

3. 事業の効果

事業実施地では景観が見違えるように改善され、地元住民の方々の評判も良好です。実際に作業を行った森林ボランティアの方々からは、自らの活動が森林の機能回復に繋がり森林への関心がさらに高まったという声もありました。また、宇陀市向湊の事業実施地では、平成20年8月に小学生対象のイベント「竹と遊ぶ夏休み」（奈良県制定「山と森林の月間」協賛イベント）が行われることも決定しており、森林環境や景観の改善という面だけでなく事業地の有効活用や地元の活性化にも繋がっています。



作業前の竹林



作業後の竹林